

令和六年度一般選考試験

試験問題

受 験 番 号

国語

受験上の注意

- 一、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 二、問題は13ページあります。
- 三、試験時間は六十分です。
- 四、解答に字数制限がある場合、句読点や
符号は一字と数えます。

三重中学校

【一】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

スローロリスのエサは、動き回る昆虫である。

A

昆虫をエサにする動物は大変である。

すばやく動く昆虫をつかまえるためには、相当のスピードでつかまえないといけない。

a、昆虫もつかまって食べられたくないから、さらにすばやく動くように進化を遂げる。

そんな昆虫をつかまえるためには、動物の方もさらにスピードアップしなければならない。

まさに¹ 終わりのなきスピード競争だ。

その結果、すばやく動く昆虫とすばやく動く動物が、共に進化を遂げてきたのだ。

それでも、すばやく動く昆虫をつかまえるのは、簡単なことではない。

B

それなのに、昆虫をエサにするはずのスローロリスは、すばやく動くことができない。その名のとおり、動きがスローなのである。

神さまはどうして、こんなふしぎな生き物をお創りになったのだろう。

すばやく動く昆虫を捕らえるには、すばやく動かなければならない。

しかし、スピードアップにも限界がある。

そこで、スローロリスが考えた戦略はこうだ。

「動きが見えないくらいスピードを遅くする」

昆虫は敵からすばやく逃げなければならない。

そのため、すばやく動くものに敏感だ。どんなにすばやく襲いかかっても、その動きを察知して逃げてしまう。すばやく逃げる昆虫を捕らえることは簡単ではないのだ。

昆虫は動くものに敏感な一方、動かないものに対しては鈍感である。

そのため、ゆっくりとゆっくりと近づけば、昆虫に気がつかれることなく捕らえることができるのである。

「スピード」に対抗するもっとも強力な手段は、「①」だったのだ。

まさに逆転の発想である。

つまり、その「①」こそがスローロリスの武器なのだ。

思い出すのは、横浜ベイスターズの、2三浦大輔元投手だ。

舞台は、選り抜きの選手がそろうオールスターゲーム。相手はその後、大リーグで活躍することに³なる大谷翔平選手だ。大谷選手は球界最速の一六〇キロメートルを超えるスピードボールを投げる。そして、大谷選手は投手だけではなく、バッターとしても強打者である。

「この大谷選手をバッターに迎えて、三浦選手はどのようなボールを投げるだろう」と、誰もが息を飲んだ。

このとき三浦選手が投げたのが、計測不能なほど遅い超スローボールである。

スピードでは大谷選手にはかなわない、そうであるとすれば誰よりも遅いボールを投げようと考えたのだ。そしてその遅いボールで見事に大谷選手をピッチャーゴロに打ち取った。

スピードボールだけが誰にも負けないボールではない。誰よりも遅いボールを投げることも、誰にも負けないボールなのだ。

もちろん、誰よりも遅いボールを投げることも簡単なことではない。三浦選手はこの対戦のためにひそかに練習を積んでいたことは言うまでもない。

C

動きがスローであれば、肉食獣に見つかりにくいという利点もある。

ただし、見つかったら一巻の終わりである。スローロリスは逃げることができないのだ。

スローロリスは、そのための準備も怠らない。

b、スローロリスは肘の内側に毒腺を持つ。しかもその毒は唾液と混ざるとさらに強力になると言う。この毒で敵から身を守っているのである。

それだけではない。

D

毒ガエルや毛虫のように、毒を持つ生き物は、自分を目立たせるような色をしていることが多い。ふつうの生物は目立たないようにして身を守っている。②、毒を持つ生き物は、自らの存在を目立たせることで、誤って食べられることのないようにしているのである。

じつはスローロリスの顔の模様も毒があることを誇示しているのではないかと考えられている。

スローロリスにとって、スローであることは、武器である。

誰にも負けない「のろさ」こそが、誰にも負けない「強さ」なのだ。

他の生き物たちがスピードを競い合って進化すればするほど、⁴ **その武器は輝きを増す。**
かがや

何でも速ければいいというものではない。
スピードを競えばいいというわけではない。

E

(稲垣栄洋 『ナマケモノは、なぜ怠けるのか?』)

問1 **a**・**b**に入る語句として最も適切なものを、次の**ア**～**オ**からそれぞれ一つ選び、

記号で答えなさい。

ア そして **イ** じつは **ウ** つまり **エ** しかし **オ** かりに

問2 本文中には次の一文が抜けています。これが入る箇所を**A**～**E**から一つ選び、
記号で答えなさい。

だからね、動きのスローなスローロリスも、そのままでもいいんだよ。

問3 **①** (二カ所)に入る語句として適切なものを、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問4 ――線1「終わりにきスピード競争」とはどういうことですか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食べられたくない昆虫がすばやく動くように進化すると、その昆虫をつかまえるためにすばやく動くように進化する動物のたちごっこともいえる競争。

イ すばやく動くようにどんどん進化する昆虫の進化と、その昆虫をエサにするスローロリスの動きの速度をあげようとする進化のいつまでも続く競争。

ウ スローロリスの動きがどんどん遅くなるのと、それに合わせるかのように動きを遅くして食べられまいとする昆虫たちの継続的な競争。

エ 人間が環境を悪化させたことで動植物が絶滅する速さと、神さまが新しい生き物をお創りになる速さの絶え間ない競争。

オ 昆虫の進化も動物の進化もスローロリスの進化も、どれも目には見えないほどのゆっくりとしたもので差をつけられないということ。

問5 ――線2・3「三浦大輔元投手」と「大谷翔平選手」の話はこの文章の中でどのような役割をしていますか。次の説明文の空欄に、それぞれ指示された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

「三浦大輔元投手」と「大谷翔平選手」の話は、あ(十八字)ということを説明する役割を果たしている。「大谷翔平選手」は、スローロリスに対する肉食獣のような強敵の例えである。誰もがスピードで打ち取ろうとする「大谷翔平選手」に対して、「三浦大輔元投手」は、スピードを追求するのではなく、い(五字)で超スローボールで勝負して打ち取った。その様は、スローロリスの生きる戦略と通じるものがある。

問6 ②に入る語句として適切なものを、本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問7 本文の内容と**合わないもの**を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 動物に食べられたくない昆虫と、昆虫をエサにしたい動物とは、どちらもすばやく動くように進化を遂げてきたが、スローロリスはその競争に参加しない戦略をとった。

イ オールスターゲームで大谷翔平選手をピッチャーゴロに打ち取った三浦大輔元投手は、誰よりも遅いボールを投げる練習をひそかに積んでいた。

ウ スローロリスは動きが遅いので、動きの速い肉食獣に見つかってしまったら逃げられないが、次の備えとして肘の内側に身を守るための毒を持っている。

エ ふつうの生物は、身を守るために目立たないようにしているが、毒を持つ生物は、自分を目立たせるような色をしている場合が多い。

オ スローロリスの顔の模様は、ほかの多くの動物と同じように、身を守るために目立たない模様になっている。

問8 ———線4「その武器は輝きを増す」とはどういうことですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二学期の終わりの学期試験がせまってきた十二月の初め、教室でよく居眠りしていた浦川君が数日欠席しました。「かぜをひいたのかもしれない」と考えたコペル君は、浦川君の家をたずねてみることにしました。

北向きの、粗末な三畳の部屋でした。

※¹一間の肘掛け窓に曇りガラスがはまって、そのガラス戸の一番上の段だけが、透しになっていきます。そこから、鋼のような冬の青空がのぞかれました。外には、風の唸り声が聞えて、ガラス戸は絶えずガタガタと震えていました。

窓の前に置いてある小さな机の上に、本やノートや、見覚えのある浦川君のカバンがのっています。二人は、そのそばに、薄ッぺらな座蒲団を敷いて、向かいあいに坐りました。そして、瀬戸の火鉢に、両方から手をさし出しました。浦川君の手には、霜やけがいっぱい出来て、人差指の曲り目に、一つ大きなあか切れが、口をあいていました。

「君、学期試験はいつからかしら。」

浦川君がたずねました。

「十七日からだって。」

「日割りはまだ発表されたの。」

「ううん、まだ。——でも、こんどの月曜あたりにわかるって、みんながいつてるぜ。」

浦川君は、そう聞くと、心配でたまらなそうな顔をしました。

「英語は、何ページ進んだの。」

「十六課の終りまで。」

「数学は？」

「今日から比例になったよ。」

国語は？ 歴史は？ 地理は？ 博物は？ と、浦川君は課目の一つ一つについて、自分の休んでいた間にどのくらい進んだか、熱心にたずねました。コペル君は、浦川君の教科書をめくって、²「一々、ここまで進んだと教えてやりました。浦川君は、そこへしるしをつけてゆきながら、何度も何度もページ数を数えていました。あんまり心配そうなので、コペル君も気の毒になりました。」

「君、大丈夫だよ。五日はッち休んだって、すぐ追いつけるよ。」

「そうかしら。でも、僕、昼間はまるで暇がないし、夜になると眠くって……」

「それだって、いまやってるところは、とてもやさしいんだもの。」 **a** やっちなえるさ。」

「そりゃあ、本田君なんか頭がいいんだもの。」

浦川君は、そういつて ³寂しうに笑いました。浦川君は、ふだんでも、朝暗いうちに起きて、うち中の者が総がかりでお豆腐を作るのを手伝い、それから大急ぎで学校に出るのでした。だから、ちょうどおひる頃になると、なんとしても眠気を催して来て、つい教室で居眠りをしてしまうのです。それが、いまのように、お父さんはいず、店の者が病氣したとなると、まだ来たばかりで馴れない若い衆一人を相手に、お母さんと三人で店をやってゆくためには、いつもの三倍も働かねばなりません。まだ子供で力こそありませんでしたが、仕事の手順を知っている浦川君は、 ⁴来たての若い衆のコーチをするためにも、なくてはならない人なのです。しかし、試験は近づくし、学業はおくれているし、学校のことを思うと、かわいそうに浦川君は、気が気ではないのです。

「君、いつから学校に出られるの。」

と、コペル君も心配してたずねました。

「おとつつあんさえ帰ってくれば、すぐ出られるんだけど——」

「お父さんは、なかなか帰りそうもないの？」

「わかんないのさ。ほんとなら、もうおとといあたり帰って来てるはずなんだけれど——」

コペル君は、浦川君のお父さんがどこにいったのか、どんな用事で帰りが長びしているのか、それをたずねて見ました。浦川君は、重い口で **b**、その事情を説明しました。

浦川君の話によると、お父さんは、生れ故郷の山形県やまがたけんの田舎いなかにいつていたのでした。それは、浦川君のお母さんにとっても生れ故郷で、浦川君にとっては伯父さんや伯母さんにあたる親類が、今でも大勢、そこに暮らしているのです。コペル君は、 ⁵浦川君のうかが相模屋という屋号なのに、故郷が山形県だというのはおかしいと思いましたが、それは、浦川君のお父さんが独立して今の店をもつとき、以前勤めていた店の名をもらったからだ、と浦川君が説明してくれました。

お父さんの用事というのは、お金を工面くめんして来ることでした。何百円か、何十円か、それは浦川君にはわかりません。なぜ、そのお金が必要なのか、それも浦川君はよく知りません。しかし、とにかく、お父さんは今そのお金がないとたいへんこまるのです。それで、雪の深い山形県の田舎まで、伯父さんたちに相談をしにいったのです。帰りがのびているのは、そのお金がなかなか出来ないからに違いありません。浦川君の知っているのはそれだけでしたが、それだけしか知らないのです、なお一層浦川君の心は不安でした。ぽつぽつと、この話をしている浦川君の顔には、 ⁶子供のくせに、まるで大人のような暗いかげがさしていました。

「でも、君、このこと誰にも話さないでね。おつかさんだって、僕が知らないと思ってるんだから。」

と、浦川君は小さな声でいいました。

「僕、おとつあんがたつ前の晩、夜中に眼をさましたの。そしたら、おとつあんとおつかさんが、今のような話をしてたんさ。」

コペル君は、なんといつて浦川君を慰めたらいいのか、言葉が見つかりませんでした。

⁷何とも例えようのない重々しい気持でした。生まれてから今までに、こんな胸を押しつけるようなものは、感じたことがありません。浦川君を気の毒だとは思っても、コペル君に何が出来ましょう。また、浦川君が本気になって心配していることを思えば、何でいい加減な言葉などがいえましょう。コペル君は、黙って火鉢の中の炭火を見つめていました。――ガラス戸がガタガタとふるえて、外に絶え間なく唸っている風の音が、遠く、すさまじくコペル君の耳に聞えて来ました。

「ほんとに、誰にもいわないでね。」

と、しばらくしてから、浦川君がいました。

「ああ、いやしないよ。」

コペル君は、救われたような気持で答えました。そう答えることが、いくらかでも浦川君を慰めることになるなら、コペル君だって助かります。言葉は、知らず識らず、意気こんでいました。

「いわないとも。きつと、いわないよ。僕、指切りしてもいいや。」

そういつて、コペル君は、小指をのばした手をさし出しました。浦川君を喜ばすためなら、どんな約束をしてもいいという気持でした。

浦川君の霜やけで赤くなった小指が、コペル君の小指とからみあいました。二人は、指にギュッと力を入れて引っぱりました。その瞬間、コペル君も、浦川君も、ちょっと真剣な顔になりました。殊に浦川君は、霜やけの指の痛さをじっと我慢して、口をかたく結びましたが、指がパツと解けると、二人は思わず顔を見あわして笑いました。

浦川君の顔には、コペル君に対する **C** が、いっぱいにあふれていました。

※1 「一間」は長さを表す単位。「二間」は約一・八二メートル。
※2 「屋号」 個人で商売をするときなどにつける店の名前。

問1 ――線1「□をあいていました」とありますが、このあか切れの様子を表す語として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア じつくりと イ びっしりと ウ きっちりと
エ ぱっくりと オ すっきりと

問2 ――線2「一々」とありますが、ここからうかがえるコペル君の気持ちや態度として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友だちの苦境をなんとか救いたいと感じているので、丁寧^{ていねい}に。
イ 細かいことにかまっていられない友に配慮^{はいりよ}して、おおまかに。
ウ 同じクラスで学ぶクラスメイトとしての義務感を強く意識して。
エ 友だちが大変なのは理解しているものの、わずらわしく感じて。
オ 沈^{しず}んでいる友を励^{はげ}まそうと、わざと明るいふんいきを作ろうとして。

問3 a・bに入る語句として最も適切なものを、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア だらだらと イ そろりそろりと ウ ぼつりぼつりと
エ じわりじわりと オ チョコチョコツと

問4 ――線3「寂しそうに笑いました」とありますが、この時の浦川君の気持ちと様子について最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本田君は頭がいい上に金持ちで、不公平な世の中をどうすることもできないことを嘆き、自分は一生不幸なまま生きていかなくはないとあきらめている。

イ 頭のいい本田君には勉強のできない自分の気持ちなどわかってもらえるはずがないと悲しく思い、どうせ試験はできないと自分をあざ笑っている。

ウ 他人事だと思って、「いまやってるところは、とてもやさしい」という本田君とは本当の友だちにはなれないと寂しさを感じ、話をすることもばかしくなっている。

エ 友だちのふりをしていても、昼間働かなくてはならない自分の苦勞に気づかない本田君に寂しさを感じ、他人に自分の気持ちはわからないと冷ややかに笑っている。

オ 昼間は働き勉強のおくれている自分と、頭のいい本田君との境遇の違いを悲しく感じ、そんなことは気にせずアドバイスをしてくれる本田君に笑顔を向けている。

問5 ――線4「来たての」とはどういうことですか。本文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問6 ――線5「浦川君のうちが相模屋という屋号なのに、故郷が山形県だというのはおかしい」とありますが、コペル君はどうして「おかしい」と思ったのですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問7 ――線6「子供のくせに、まるで大人のような暗いかげがさしていました」とはどういうことですか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 元気いっぱいいつでも外で遊んでいたらしい子供であるのに、体力がおとろえてしまった大人のように浦川君が弱々しく見えたということ。

イ 本来家庭の事情など深刻に考えなくてよいはずの子供であるのに、複雑な事情に頭を悩ませ不安を感じている様子が浦川君に見て取れたということ。

ウ お金のことなどまだよくわからない子供であるのに、でしゃばって家庭の事情に口出ししようとする姿勢が浦川君に見えたということ。

エ 金銭問題など解決できる力があるはずもない子供であるのに、それでも何とかしようと立ち向かう力強さが浦川君に見えたということ。

オ まだ考え方も幼い未熟な子供であるのに、ものがわかった大人のような気取ったふるまいをしているのが浦川君に見て取れたということ。

問8 ――線7「何とも例えようのない重々しい気持でした」とありますが、だれの、どのような気持ちですか。解答欄に従って、具体的に説明しなさい。

問9 cに入る語句として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 敬意 イ 嫉妬 しつと ウ 信頼 しんらい エ 同情 オ 期待

問10 本文の内容と**合わないもの**を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア コペル君と浦川君がいる家の屋根には穴があいていて、そこから冬の青空が見えている。

イ 浦川君は五日間学校を休んでいて、勉強のおくれを気にしている。

ウ 浦川君は豆腐作りの仕事の手順を知っており、若い衆に教えることができる。

エ 浦川君のお父さんは、生れ故郷の山形県の田舎にいつている。

オ お父さんが何の用事で山形県に行ったかを浦川君は知らないと、浦川君のお母さんは思っている。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑫の――線について、カタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① ゲキヤクの取りあつかいに注意する。
- ② 基本にチュウジツな練習を重ねる。
- ③ 部屋のセイリを心がける。
- ④ 実力をハツキする。
- ⑤ 水分のジヨウハツを防ぐ。
- ⑥ 本居宣長のコウセキをたたえる。
- ⑦ 時計の針が時をキザむ。
- ⑧ 個人商店をイトナむ。
- ⑨ 穀物の生産量を増やす。
- ⑩ 茶道の所作を身につける。
- ⑪ 裁判官による裁きを受ける。
- ⑫ お年寄りを敬う気持ちが大切だ。

問2 次の各組の言葉が反対の意味になるように、に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 利益―損
- ② 支配―従
- ③ 許可― 止

問3 次の各組の言葉が同じような意味になるように、に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 手段―方
- ② 完全―無
- ③ 宣伝― 告

問4 次の①～③の各文の□に入る四字熟語として適切なものを、あとの選択肢からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 和歌をよむと、昔の人が四季折々の□を愛したことがよくわかる。
- ② 都会の何でもすぐ手に入る生活はお金がかかりすぎるから、私はいなかで畑を耕しながら□の生活をするほうが好きだな。
- ③ あの人はやると決めたら黙々とやりぬく性格で、まさに□の人だから、まかせておいたらいいと思うよ。

ア 不言実行 イ 我田引水 ウ 一日千秋 エ 一挙兩得
オ 自給自足 カ 大器晩成 キ 花鳥風月 ク 異口同音

問5 次の①～④の語の意味として適切なものを、あとの選択肢からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 几帳面 ② 有頂天 ③ 正念場 ④ 破天荒

- ア 俗世間を離れたすばらしい別世界。
- イ わき目もふらずに走っていく様子。
- ウ うまくいった喜びで夢中になっていること。
- エ 今まで誰もしなかったようなことをすること。
- オ 事のなりゆきをうかがってなかなか判断しないこと。
- カ 物事をすみずみまで気をつけて、きちんとする様子。
- キ 冷たい目で人を見て、きらいな人に荒々しく接すること。
- ク ある事の価値、人物の力量をみきわめる材料になりそうな物事。
- ケ その場にふさわしくない行動をとること。
- コ ここぞという大事な場面。局面。

